

い、という気持ちになった。その代わり、本論文では、第二節として「ハイデガーの〔無〕」なる一節を著わし、第三節に「ソクラテスのダイモニオン」において、全体を統一した。もともと、筆者はシンポジウムにおいても時間が許せばハイデガーの問題を論じようと思っていたことでもあり、また、ハイデガーの哲学は神秘の問題により深く関与しているとも言えるので、論文全体としては、かえって論旨が解り易く統一されたのではないか、と思っている。御海容を戴ければ幸いである。

意見

神秘の言語化について

加藤 武

1 神秘をどこで経験するか

1992年の中世哲学会大会にひきつづいて1993年の大会でも〈中世における神秘思想〉がシンポジウムのテーマとしてえられたことは、心の砂漠化のどこまでもひろがる20世紀もどうやら終わりに近づくときに、われわれのたましいの深い奥底でオアシスを捜し求める、渇きにも似た願いから発しているように思われる。昨年、あの目にまばゆい陽光につつまれた三人の神秘家たちの姿が、会場を飾る白い大輪の百合の花もろともいつしか消えて、今年はそろって「光の神秘主義から暗い神秘主義の漆黒の闇へと移行しているような気がする」、というご指摘をなさった方があったけれども、筆者も心中、同じ感想をいただいた。上田閑照氏（以下Uと略す）、岩田靖夫氏（以下Iと略す）、おふたりが期せずして、同じ方向に探索の光を投げられたこともうれしく、シンポジウムの意義をいっそう増す結果になった。ただし、おふたりの、切れ味のよく、おそろしく長い刃渡りのスピーチにうっとりわれを忘れて聴き入り、思わず内心賞讃の声をあげつつも——とりわけ、Uは山田晶氏の質問をうけるままに用意された原稿によらないでみごとな即興演奏をされた！——、大切な質問・討論という合戦の時間がいかにも足りないことを惜しまれ、あるいは言葉の短剣を片手に持ち無沙汰で切りかかる時を失し、いささかフラストレーションをさえ覚えておられた

方も！かなりおられたのではないか。

神秘（以下、神秘思想というやや曖昧な表現を避けて神秘と呼ぶ）をどこで経験するか、これがまず、問われなければならない。ところがこういったとたんに、たちまち、われわれは挫折を経験しなければならないことになる。神秘を「精確に、目に鮮やかに」とらえることが、そもそも、できるだろうか。いやいやとんでもない。とてもとても「普通の」人間には高嶺の花でしかない。としたら、それではどこでとらえるか、これがまず問われる。Uはエックハルトの説教（DW3, 86）、有名なマリアとマルタの話为例に取り、マルタの選んだ実生活という、いわゆる法悦の美酒に酔う、月もおぼろな神秘経験のもうひとつ向こう側の谷間に、いまひとつの神秘の高貴な花が、ひときわかおり高く咲いていることを示唆されたし、Iの場合も、ソクラテス、レヴィナスをとおして、身近な倫理的な生の、酔いも醒めたしらふな経験のただなかに一このたびはお触れになられなかったけれど、レヴィナスの場合は隣人の顔とか—「他者」の「栄光」（岩田靖夫、『倫理の復権』、（岩波書店）、226頁）の裸のままの痕跡を探ろうとされていた、とお見受けした次第である。

2 神秘をいかに語るか

次に神秘をいかに語るか、神秘の言語化、それが問われなくてはならない。これまた、ただちにアポリアにつきあたる。神秘はもともと語りえないことだからだ。神秘の言語化、そんなことがはたして可能か。

Iはいう。

この了解の全体の外部が、あるいはその底がどうであるかは、真っ暗であるからである。（提題要旨、13頁）

Uはいう。

この両方向（言葉を捨てる方向と言葉に出ようという方向）への運動の交錯渦動のうちで、……、エックハルトの説教の独特な言葉世界が生み出されてくるのか。（上田閑照、『マイスター・エックハルト』、（講談社）168頁）

3 日常言語のなかで

以上の1と2の問いにどうアプローチすればよいのか、それは、テキスト世界を精密に分析すればよいのだろうか。泥沼の中から蓮の花がひらくように、日々の言語活

動のただなかから、ことばが生まれる。そのことばはいかにうまれるか、それはなにか。これを問わなければならない。〈いわれたこと〉から〈いうこと〉へ廻らなければならない。

それは、詩的な言語の生成にひどく似ているように思われる。リルケが『ドゥイノの悲歌』第9歌において歌っている。

《Hier ist des Säglichen Zeit, hier seine Heimat.

Sprich und bekenne.》

しかしひとは反論するかもしれない。でもそれは「崇高な」、あるいは「非常に繊細な」ひとの特権的な美的経験で、とても「普通の」平均的なレベルのひとが及ぶところでない。かりにそうだとしたら、どうすればよいのか。でも日常、毎日、ひとはだれでも発語し、刻々、言葉を生み出している。なにが神秘といって、こんなに神秘なことがあるか。いや、神秘へのアプローチはこんなところからはじめるしか手がないのではないか。田島照久氏が今度の大会で、エックハルトについて生彩に富む報告をなさった際に触れられた例の「魂のなかで神の子がうまれる」ということも、ひょっとしたら、日常言語の発語という、かわりばえのしない経験のなかに、いくらかもひそんでいるように思われる。赤々と沈む夕日に照らされると、なにげない見慣れた周りの風景がみるみる黄金色に輝くように、手垢に汚れ、日常使い古した言葉が、あるとき存在のあなたから、オーロラを放つのである。

そんな魔術を、おお、ソクラテスよ、エックハルトよ、レヴィナスよ。それに、リルケにも加わっていただこうか。そなたたちは、なにかしら、ご承知であられるとみえる。それなのに、ひどくおすまして、とぼけておいでになるとは、なんとまあ、お人の悪いことよ。
